

## <論文>乱舞する幻影：吉本隆明『固有時との対話』論

著者	川鍋 義一
雑誌名	日本文学誌要
巻	57
ページ	159-167
発行年	1998-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020010">http://hdl.handle.net/10114/00020010</a>

# 乱舞する幻影

吉本隆明『固有時との対話』論

川鍋義一

## 1 抽象名詞の発見・あるいは不可能な叙景詩

「建築」。『固有時との対話』の原詩・『日時計篇』、その生成の過程と、『日時計篇』から『固有時との対話』への転位の過程とで、ともにもつとも注目すべきことのひとつは、私のことばで言うところの抽象名詞の発見ということになる。「建築」はそれを象徴する。

「風は街々の館のかげではたと止むだとき 落下していった  
わたしたちが睡るときと／おなじやかたで空洞のほうへ堕ちていった 数限りもなくそれが継続された／とき風は路の上に  
枯葉や塵芥を集積した／わたしたちは其処をさけるように歩むでいった」（風が睡る歌）

「街々の建築のかげで風はとつぜん生理のやうにおちていつ

た その時わたしたちの睡りはおなじ方法で空洞のほうへおちた 数かぎりもなく循環したあとで風は路上に枯葉や塵埃をつみかさねた わたしたちはその上に睡った」（『固有時との対話』）

「固有時との対話」冒頭について、すでに北川透、宮城賢らが重要な指摘をしているが、「建築」という詩句の発見は「固有時との対話」世界の基盤にかかわる大きな事件であったと推測できる。

「建築」とはなにか。それは第一に nowhere にのみ存在しうる直線的・無機的な論理である。私たちにはじまったものであるが、私たちに対立するように屹立し、私たちはそれに耐えられない非人間的ななにか。「館」や「建物」と見たのでは〈建築〉としての本質はあらわれない。またそこには、直線で描く〈私〉の孤独な精神のたたかいが、〈建築〉の直線としてあらわれている。——言いかえれば somewhere にある風景から〈私〉が

nowhereの風景をつくりだし、そしてたとえば論理性が、孤独が、まるで〈建築〉そのものであるかのような強い結びつきで存在していた。

私たちは、だから、これらの詩句にどんな意味でもいわゆる日本的な風景を思いうかべることはできない。困難なたたかい。〈私〉のまえにはだれも見なかった風景があった。

いや、それはそもそも見えるのか？ 空虚でかわいた、現実的な像を拒否するイメージ（「イメージ」を狭義の「像」ととらえるなら、すでに矛盾である）は〈私〉にも私たちに、論理的に感得するという、形容矛盾をきたすようなことのみが許される。たとえば宇宙はどういう形をしているのかという問いに対する答えのように。

空洞は濃密な空虚であり、同時に内壁のないいわばそれ自体で存在する不可能な空洞だ。他からの規定をうけない空洞は、やはり現実に対するきびしい拒絶を映しだしているようだが、拒絶が不可能であるというのもまたたしかなことである。

抽象名詞、それは外界に存在するなものをも指示せぬ名詞であり、現実のどのような風景を描くことも拒否する不可能な叙景詩を構成する。そして、もし叙景詩が結局は抒情性をもつものであるならば、あまりに人工的な直線が描かれ、寂寥ではなく空虚そのものがそこにあるという意味でも『固有時との対話』冒頭は不可能な叙景詩である。

この叙景詩のゆくえは――。

「風と光と影の量をわたしは自らの獲てきた風景の三要素と

考へてきたのでわたしの構成した思考の起点としていつもそれらの相対的な増減を用ひねばならないと思つた それゆえ時刻がくるとひとびとが追想のうちに沈んでしまふ習性を 影の圏の増大や 光の集積層の厚みの増加や 風の乾燥にともなふ現在への執着の稀少化によつて説明してゐたのである わたし自らにとつても追憶のうちにある孤独や悲しみはとりもなほさずわたしの存在の純化された象徴に外ならないと思はれた」

〈私〉の不幸は、〈私〉が〈世界〉を切りとる枠組みとしての力を得ている（もちろん、不断のたたかいにおいて）ことがわかる。不可能な叙景詩は消極的な意味でそうであるのではない。そのように得られた〈世界〉は、でも、ひとつのフィクションではないのだろうか？ たしかに〈世界〉をとらえようとするすべての枠組みと同じようにフィクションである。〈私〉にはそれが〈世界〉の本当の姿と映り、他のある人々にも虚偽ではなく、それぞれの〈世界〉観の伝播する力には差があるという意味でも。<sup>（註）</sup>

## 2 万華鏡のなかの詩句たち

現実の像をとまなわなないイメージがたとえば論理性、あるいは孤独といったものとむすびつくということは、別の視点からの光をも要求する。それを多義性と言ってもよい。

「わたしは独りのときすべての形態に静寂をみつけた  
それからすべての形態はその場処に自らを睡らせるやうに思は

れた　とりわけ：雲が睡入るさまはわたしをよろこばせた　建築のあひだや運河のうへで　雲はその形態のまま睡入つてしまふやうに思はれた」

この澄明な叙景詩のうしろには作者・吉本隆明の近所、下町の生活臭あふれる風景がかくされているのだろうか。ともかくここではイメージは像——どこでもない場所の、像をとまなう風景——としての性質をかなり強くもち、その分だけ相対的に〈私〉ののびきらないなにかの表出は弱くなる（この関係は『固有時との対話』全編をつらぬいている）。

直後の連で一変、像は希薄になる。

「わたしはその静寂の時をとめた　雲は形態を自らの場処にとめる　すると静寂はわたしの意識をとめてしまふやうであつた　忘却といふものをみんなが過去の方向に考へてゐるやうにわたしはそれを未来のほうへ考へてゐた　だから未来はすべて空洞のなかに入りこむやうに感じられた

へわたしの遇ひにゆくものたちよ

それは忘却をまねきよせないためにすべて過去の方に在らねばならない」

粘着質をあえて自らに求める暗い心性である。「雲」は〈私〉の封じられた記憶をひっぱりだす役を負い、「雲」＝「建築」の連合から、ひるがえって〈建築〉のもつ論理性とかいったものが

あらわれる（暗いところは情念だけでなく、論理性で武装されているのだ、心性が論理で武装する、『固有時との対話』の最終部はすでに発酵していると私たちの考えは広がる）。

「雲」はことなつたレベルの像をもち、したがってそれと不可分の〈私〉の表出も単一の相におさまらない。

いま引用した箇所でももちいられている「時間」と「形態」は他の箇所にもあらわれ、重要な問題をあらわす。

最終部・5章では「時間」と「時」が頻出する。それ以外にも同一語が二度三度ともちいられているが、それによってどんな効果がうまれるか。ある詩句が第二の詩句と連合する、ふたび前者があらわれ円環が閉じられる、そこに第二の詩句がまたあらわれて第三の詩句と結合して……といった鎖みたいな構造をもっているとおおよそ言つてよい。こうして言語世界はきわめて濃密に構成される。「時間」「時」は、第一に内在する時間すなわち思想のたたかいの場としての時間である。この時間は〈私〉を安住させない。この点で〈私〉の内包する対立者である。一方、外在する時間は具体的には〈人々〉の顔をもつた〈私〉に対立的ななにかである。つまり『固有時との対話』全編をつうじて、「時間」「時」は〈私〉の内包する〈私〉に親しいものであるが、同時に〈私〉をつつみこんで対立するなにかでもある。5章で「時間」「時」は詩句の連合を完結させ、さらに外的と内的の時間を対比することで、さまざまな相の「時間」「時」の連合を強化し詩的世界を膨張させている。

混乱？　そうではない。この多義性は、内的と外的の時間の峻別は便宜的なものにすぎぬと私たちに教える。

「形態」は「形」とはちがったものである。〈私〉は形を信用しない（「わたしは現実から獲取したもので何らか形あるものはすべて信じなかつた」）が、それは現象そのものに対する不信ではなく、認識の不十分さに対する不信感である。『固有時との対話』の風景は形を失い、しかし形態を保っているということになる。

ところがその考えを否定するような部分もあつて、「如何なることも形態に則して為されてはならない」。これはおそらく「形」である。これほど極端なものはここ以外にはないが、「表現」のようなものから、〈私〉の認識とかかわるもの、推移する相にあるものまでを「形態」はふくんでいる。この幅とふくみは「建築」や「時間」「時」でも同じことだが、「形態」では広がりのある一点にゆるやかに収束してゆくというはたらかしはない。推移するなかで〈私〉の認識にあらわれる固有のなにかという意味もあれば、また「雲はその形態のまま睡入つてしまふやうに思はれた」はそもそも雲の「形態」がはかないものであるという考えが前提でなければならぬのである。後者などたしかに「形態」でなければならず、しかも「形」の部分をもつてみいる。では「建築」などとのその点におけるちがいをどう見るか。万華鏡のなかの詩句という問題を象徴するものとして、その多義性そのものに意味を認めたい。

多義性というならその多義性自体にいろんなパターンがあるということだ。そして、個々のケースについて、多義性を単に混乱とするのか、あるいは共通するなにかをそれらのあいだにさがすのか。

いま私たちは万華鏡をのぞいていると仮定してみる。そのなかにあるのはたしかに同じ破片であると思えるのだが、ときによつて別の方向を向き、別の破片と結びつき、鏡に反射され像を形成する。でも、それは本当に同じ破片なのか。そして、もしかすると像が変移してゆく運動の過程こそが万華鏡の世界だと思なければならぬのではないか。私たちは詩句の相互の関係を読み、詩的世界のありようをさぐりたい。それははかなく推移する万華鏡のなかの像を追いかけるむなし作業であろうか。しかし『固有時との対話』の本質はそうすることを要求していると思えた。

### 3 破片の転移、その航跡

『固有時との対話』を\*によつて区切られた全五章構成と見ると『日時計篇』のでたらめな裁断・配列の産物であるとはとうてい思われない。多様性・多義性の問題を広くとらえようとすることは、各章の固有のありかた、また、各章の相互の関連について考えることと同じである。

1章で私たちは詩的世界に突然、出会う。ここには像になることを拒否する、風と建築と濃密な空虚がある。そして「わたしたちはその上に睡つた」から「私たちは不幸をことさらに掻き立てるために／自らの睡りをさまさうとした」にあらわれる、自己の宿命すなわち不幸に対するアンビバレンス。

風に続いて2章では光と影があらわれ「風景の三要素」がそろふ。1章では建築は論理性や空虚そのもののようであらわさ

れているのに対し、2章の風景は像としての性質がずいぶん前面に出ており、そのちがいに私たちはおどろく。そして、〈私〉の描いた風景が孤独感の表白と不安な緊張をたちながら不可分にむすびつけられている。内閉的な孤独感・行き場のない寂寥感がつきぬける契機をもとめていることが明らかにされている。「わたしの沈黙が通ふみち」の追求は表面上、この2章にあらわれるだけだ。だから単に一度あらわれた些末な問題なのか。そうではなくて『固有時との対話』という孤独の深化が〈私〉にとつては〈連帯〉の途であると信じられた、という逆説であり、また、ある意味でもっとも不安なものを感じさせる2章が最終章の高いボルテージと通底していると見れば、それも意味のあることだ。

さて、『固有時との対話』を風景ということととらえようとするとしても3章冒頭《》で囲まれた箇所、突然の現実像についてふれなければならなくなる。

「砂礫の山積みはたしか築岸工事に用ひるためのものであつたらう　あたりに人影もなく　赤い工事用のカンテラがほうりなげてあつた……」

「わたしはその頃　わが家のまへのアスファルト路が夏になると溶けてしまふのを視てゐたものだ　そうして貨物自動車が通つた跡には齒形のやうなタイヤの痕跡が深く食ひこんでそれからしばらく経つた頃　道路工夫が白と黒のわく木を立てて補修にやつてきた」(傍点原文)

現実像が突然にたちあがり、《》以降また突然に風景とのかかわりは失われる。これはどういうことか。そしてこの風景は抽象化されていてはならなかったのか。

すでに見たようにことばが像を喚起する程度に応じて表出の切実さは低下する(しかもこの風景はまさしく somewhere の風景である)。砂礫から時間、アスファルトから粘着する悪意といったものを想起することはできても。そして、どこかにある風景を描くことではなく、どうしてそうであるのかわからないままに具体的なイメージが〈私〉のなかに固定されている意味を描くことが、むしろ問題なのであつた。そのふたつによって、3章冒頭の風景は像を残してあつてなく消え、また、それ自体としてはさしせまつたものを感じさせないのである。過去と現在の混在する不思議な光景が代替不能なイメージとして〈私〉を支配し、またその光景が内省——現在の自己の衰弱と狡猾を見つめ、孤独Ⅱ宿命のありかたを考える——の契機としてぜひとも不可欠だったということだ。

4章では3章でひとたび失われた風景とのつながり、というよりはその三要素とのつながりが完全に回復している。でも4章の濃密さはなんだろう。

3章が描いてきたゆるやかな曲線をうけ、4章は静かにその曲率を大きくしてゆく。するとほとんど〈私〉のなまの声が聞こえるようだ。

宿命の覚醒は、突然の追憶としておとずれた。もしかしてたびたびやってくる〈世界〉への違和感として徐々にあらわれてきたのかもしれない。そして〈私〉の生そのものである、たた

かい。〈私〉が生を求めて、外界と〈私〉自身に向きあう。それは宿命にあらがい、同時にそれを不断につくりだす過程でもある。そこで〈私〉は安定をこととする日常性へのアンビバレンスを認識し、自己を相対化している。「わたしはただわたしの膨脹を信じてゐたのだ。そうして膨脹を確めるために忍耐づよく時間には抗はねばならなかった」。この箇所を待つまでもなく、〈私〉自身へのあらがいは、〈私〉自身（と他者）を相対化したことにすでにかくされていたと見るべきだ。その相対化のうえに自己の規準を貫徹しようとする。それらと表裏一体の絶望的な孤独感・孤立感。

ここでは風景の三要素は〈私〉の表出と矛盾しない。1章では風景と言えないような風景が〈私〉の表出であつたが、〈私〉というフィクションと三要素が美しく一致している様相がここにはあらわれている（〈私〉自身が風景から疎外されていると見ていることはまた別の問題である）。

だがこれはあまり正確な言い方ではない。三要素は風景を描かず、他のどの箇所よりも〈私〉をなまなましく描く。風景は4章はじめこそ1章にいくらか似るものの、既出のどの風景にも近くない。三要素は〈私〉という火碎流の成分みたいなもので、混沌とした運動のなかにあつて、それとは別のものであることはない。この火碎流をまえにして私たちは静かでないものをも許さぬ苛酷さを濃密に感じるのである。

4章が描いた曲線は5章で『固有時との対話』を収束させる。でも単に円が閉じられたのではない。この曲線は運動を止めない。「骸骨のやうに瘦せた流人に歩行させ 自らはあざ嚙はうと

してゐる時間よ」。この表現は『固有時との対話』のレベルではない。像をもつた比喻が憎悪の表出になる——これはすでに『転位のための十篇』である。さらに現実には〈私〉固有の切りとりかたをされ、秋（それは破滅直前の季節だ）の不安、「ひとびと」への愛と憎悪とに結びつけて像にされる。

もし詩的世界の「とつぜん」の終結を言うのであれば、5章冒頭に「とつぜんあらゆるものは意味をやめる」とあることなく、ここに求められなければならない。けれどそれは本当に突然のおわりなのか。

「街々の建築のかげで風はとつぜん生理のやうにおちていつた」。はじまりはたしかに突然だつた。私たちは不可能な叙景詩Ⅱ不可能な抒情詩に出会い、ここで建物は建築であり、空洞はあくまで濃密な空虚を満たしていた。やがて像をとりもどした〈世界〉は〈私〉も私たちも現実には認めることのできない姿をしていた。たとえば静まった影がふたたびゆるやかに動き出したというただそれだけのことなのに、私たちのまえには速度の変つた〈世界〉があるかのように感じられる。

逆説的な言い方になるが他者との通行、〈連帯〉を求めるのは〈私〉が孤独をうたい、他者は孤独の裏側にあるものとして間接的にしかあらわれないこの箇所であるしかなかったのだらう。つまり——、現実像を経て、「わたしの時間のなかで孤独はいちばん小さな条件にすぎなかつた」、そして「わたしはわたしの宿命の時刻を撰択した」。そのままでは消極的な条件にすぎないものを、たたかうべき対象、生きるべき宿命にしたとき、風景は現実像であることをやめ、三要素に還元されてとらえられ、

〈私〉の内面といわばもつとも自然な対応をする。すなわち〈世界〉Ⅱ風景からの疎外・対立が、孤独という宿命を深化したところで鮮明になったとき風景を描くことは〈私〉の表出となり、さらに、そこから他者との通行は求められるべきであったのだ。風景のこの変化は、『固有時との対話』の終結、『転位のための十篇』への転位が必然であったことを示している。

しかし、たとえば——。空洞とむすびつけられた建築と、どこか牧歌的など言ってもいいような雲と建築の描写。さらに「言ふべくして秘めてきた沢山の言葉」がつくりあげる沈黙の建築（それは『固有時との対話』世界すべてか）。「建築」については後出の「建築」にすべて包摂されるのであろうか。もし『転位のための十篇』的な世界にのみ価値を認めるならばそうなる。しかし『固有時との対話』のすべての過程を重視し、その運動すべてに価値を認めたいと思う。詩全体の構成から考えたとき、万華鏡はこういうことでもある。

#### 4 〈私〉とはだれか

この万華鏡に似た詩世界の運動が、全体としてうつしだすものはなにか。すなわち、風景の水準の変化を問う。私の読みの逸脱はここからはじまる。結果、前節3までの考えを自ら否定してしまうかもしれない。

私たちは『固有時との対話』すべての過程を通して〈私〉に迫る。〈私〉は作者からも作者のまへの現実からも疎外されている。では、そこからのみ〈私〉の立ちあがる基盤である風景Ⅱ

『固有時との対話』と〈私〉はどのようにかかわるのだろうか。

〈私〉が風景の結晶としてうかがえるものであるという考えはおそらくちがう。また、〈私〉がそれらの風景を正しく統一する超越者の位置にあるとも思えない。むしろ私たちはひきつった表情といったものを感じてしまうのをどうにもできない。行きつく果ては狂気か、廃疾か。〈私〉のそのような不安やおそれに実は可能性が胚胎している。

そもそも、風景とはなにか。なにを写像しているのか。そこに描かれた風景は心象風景と言うべきものか。つまり〈私〉といかにかかわるか。それにはまず内的と外的ということを相対化すべきだ。

内的と外的を区別しなければならぬ。これは私たちにひろく常識になっていることである。つまり、内的世界と外的世界。また内的時間と外的時間。〈固有時〉というのは内的な時間であって、それは〈世界〉である外的時間と対立するもののようである。

だが内面というものはある深い闇として根本のところでは外界と分かちがたく、そこからの変形をつねにこうむる。そして外界と同じにするべく私たちに対立してくる。第一、客観的実在に見える外部は実は他者との通行の可能性をもった〈私的な認識〉である。内的と外的というのは絶対のメルクマールによって截然と区分されるものではない。表現はすべて〈私〉をあらわそうとするところみだ。

作者は筆を置いてのち、完結した感じがもてたのだろうか。ここには、内と外の混沌からそれらのするどい対立の意識まで



が不分明のままにたたきこまれ、内面すらも対立的なものであり、また、どのように風景のレベルを推移させてみても作者と等身大の〈私〉が形成されたとは考えることができなかったのではない。しかし、『固有時との対話』に定着されている〈私〉の認識——たとえば疎外感——は、作者の疎外感とも、作者が〈私〉に仮託しえたと思っている疎外感ともかわりをもつ必要などない。〈私〉のはるか後方につくねんと立ちすくんでいる、いや虚空と格闘している作者のたたかいは、この『固有時との対話』という運動体の、止まぬ運動の過程そのものとしてあらわれているのだ。そして等身大というならこの風景のうつりかわりと、それを前にした〈私〉のひきつった顔すべてをふくんだ、運動全体に対して〈私〉（作者ではなく）が等身大だと考えるべきなのである。<sup>（註2）</sup>

さらにいくらか視点を変えて見れば、風景の水準をいろいろに変化させること自体に、論理にしたがって孤独に孤独とあらがう〈私〉の生があらわれていると見ることもできる。これは作者は自覚的だったのだろうか。

定着されたことばはそれともっとも親しい者であるはずの表現者に対して、疎遠な存在となる。——私たちは〈本当のこと〉を言えたと信じられるのか？ 否。ペンは沈黙の一手手前で立ち止まってしまふ。そこにつきささることは決してない、と思われる。しかし、にもかかわらず、表現されたなにかはそれ自体としてひとつの運動体になる。読み手は運動体のゆくえに目をこらし、さらに作者との乖離と、彼がそのむなしさに耐えているさまを自由に想定し、それら全てをたたかひの過程と見る

のだ。

〈私〉は吉本隆明のなかに閉じこめられているわけではない。相互に自由であるという見かたをすれば、この開かれた構造と関係こそが他者との疎通の可能性をゆたかに示すのである。

## 5 うたとのわかれ、すなわち出会い

では、疎通の可能性とはどういうことか。それには4章——あの、〈私〉の根源につきささろうとしたさまがありありとあらわれ、そこが〈連帯〉の契機になるにちがいないと思われた4章を問わねばならない。

言語の水準のめまぐるしい変化そのものが論理と孤独の表白であると認めたにもかかわらず、〈私〉も作者も私たちも4章が大事だと思っている。これはなぜか。

ここに論理と孤独が、より直接的にうたわれているだけでなく、『固有時との対話』世界の根源にあたる問題——内面と、外的世界という名の内面の構造のありよう——がここで問われている。他の章の最深部にこの4章があると信じられるからだ。〈私〉は自己を相対化しているが、〈私〉にとって内と外はすぐどく対立している。そして、私たちは内と外の対立という考え自体を相対化したか、〈私〉とはなにか、〈世界とはなにか〉という問いはつねにわきおこるもので、私たちは〈私〉、内面を問うことも、〈世界〉が対立的に映る（あるいは融和的に見える）ことも否定できないと知っている。

さらに〈連帯〉がより本質的に希求されているからだ。4章

でえぐりだした（と信じられた）のは根源であり、そこから5章、やがて『転位のための十篇』——まさしく〈連帯〉がその世界のひとつの軸だった——へ展開すると意図されたように思われるから。

たしかにそうだ。けれど、このふたつの考えはともに問題をかかえている。

たとえば1章は表層的なのか。4章とは別のとらえかたがされているということ、〈私〉の内面につきささろうとするところのひとつとして等しく見るべきなのだ。

また、2章でより直接的に、4章でより本質的に連帯の契機が与えられているように見えた。おそらくは4章を重要だと作者は思っているだろうし、〈私〉もそのように造形されているだろう。しかし、表層の詩句にもその深層にもかかわりなく、連帯の契機は見つかる。意図されたものから自由に、『固有時との対話』世界全体をさまざまに位相を変えて行われた努力と考えるなら、もしかしてここに作者とのわけがあるのかもしれない。数学的に構成された世界に不可能の表現を見、澄明な叙景詩に抒情性を見る。あるいは〈これはおれのことではないか〉とおどろく。どこからこの〈私〉につながってもよい。4章だけではない。開かれているというのはこういうことでもある。でもさらに、あれもちがう、これもちがうと水準を変化させる過程のすべてに、むしろ共感はいまうまると言えるはずだ。

私たちは〈私〉ともわかれなければならない。〈私〉にとって内と外との対立ははっきりした原理であり、動かない。私たちにとってはどうか？ 彼によって与えられた倫理的な脅迫とも

言えるするどい自問は、私たちとの差違をたしかめという問いに等しい。この声にうながされた私たちは、そのうえなお、苦闘しつづける世界に震撼される。

けれど、言語水準の変化や作品との相互の関係から、詩句にあらわれる以上の孤独なきびしさが見られたのと同じに、〈連帯〉の契機もおそらく作者が意図したのである。『転位のための十篇』への展開だけを止まぬ運動というのではない。開かれた構造によって衝撃波を発生し、他に運動を及ぼさずにはいないこのことこそ重要なのである。

引用はすべて『吉本隆明全著作集』によった。

#### 註

1 『固有時との対話』の場合では、表現のレベルをさまざまに変化させるたかいかから〈世界〉観をすかして見るべきだ。うかびあがるのは整然とした像ではない。

2 したがって〈私〉の周囲の〈世界〉も〈私〉の心情の独白も風景である。

#### 参考文献

宮城賢『吉本隆明——冬の詩人とその詩』（国文社）

磯田光一・北川透編『鑑賞日本現代文学第30巻 埴谷雄高・吉本隆明』（角川書店）

（かわなべ よしかず・一九九六年博士課程修了）